

北欧の旅から(4)

—ランドレース種豚を訪ねて—

県畜産課 多田昌男

13、後代検定頭数と群の数

種雄豚が登録されるためには、異なった4頭の種雌豚に交配して、これら4頭の雌豚が生んだ仔豚群の中から、それぞれ1腹の仔豚平均体重に近い仔豚4頭(雌2、雄2)を選んで後代検定を受けなければなりません。したがって1頭の種雄豚の後代検定を行うためには、異なった4頭の母親から生まれた16頭の仔豚(雌8頭、雄8頭)が必要となります。これら4頭ずつの仔豚群を1グループといい、1頭の種雄豚の後代検定は、4群の仔豚を平均体重20匁から90匁まで一定の場所で飼育し、と殺して枝肉検定を行うこととなります。

前述のように種雄豚は4群(事故を考慮して3群までの減少は認められます。)の検定を受けなければならず、又所定の成績をあげなければ種雄豚として繁殖に用いることができず、登録もされません。しかし種雌豚は検定成績が悪くても登録されます。農家が繁殖養豚場になるためには、母豚は後代検定を受けなければならず、この場合検定群は1群以上であればよろしい。

種雄豚検定の一例を示しますと、検定所に送られてきた4群の仔豚のうち、1群の仔豚が2頭死亡して2頭生き残った場合、この群は検定から除外され、残りの3群のみで検定を続行します。さらに1群のうち2頭(1頭だけ死んだ場合は許される)が死亡した場合には、検定群は2群になりますので、この場合は中止され、又新しい4群を検定し直すこととなります。種雄豚の検定を行う場合、異なった4頭の雌豚以上に交配される場合もありますから4群以上の群を検定することもあります。この場合、検定群が多いただけ検定成績の信頼度は高くなります。

これらの検定群の仔豚は、検定所の同一豚房、つまり1房に4頭入れられて検定されます。

14、検定開始時体重と90匁到達日数

検定を受けようとする繁殖者はストックホルムにある農林省畜産局へ申請書を送り、農林省では申

請書に記載されている全産仔のうちから、その1腹の平均体重に1番近い仔豚から雌2、雄(去勢)2を選んで申請者に雌雄それぞれ規定群数を検定所に送るよう通知します。同時にその通知書の写しが検定所および地方畜産指導員に送られます。したがって、検定所と地方畜産指導員によって受検豚が選ばれます。

後代検定を受ける場合必要なことは、耳標番号、生後3週間後の生体重(例えば5.4~5.9匁)、後代検定所到着時生体重が18匁位あれば理想です。ですから検定所へは4頭の平均体重が約18匁の時に送られてきます。これらの仔豚は、毎週1回体重測定され、平均体重が20匁に一番近くなった時の週を検定開始の週としています。

例えば、第1週の平均体重が18.8匁、第2週が21.0匁の場合は、第2週の21.0匁の方が差が1匁で、第1週より差が少ないので、第2週目を検定開始起点とします。又第1週19匁、第2週23匁の場合は第1週目に計算した日を検定開始の起点とします。

後代検定所では検定豚を毎週1回体重測定しますが、少なくとも88匁以上になりませんと、と殺場へは送りません。毎週測定日に群の内1頭でも88匁以上になりますと、それぞれの個体毎にと殺場へ送られ、88匁に達しないものは次の週、或いはその次の週にと殺されます。従って1群のと殺時の生後日数は、4頭のそれぞれがと殺場送られる、その日までを生後から数えた日数の平均とします。検定日数とは殺時生後日数から検定開始時生後日数を差引いた日数になります。

1958~1959年にわたり検定された3,162頭の平均と殺日数は172日、毎日増体重は699瓦となっています。最高190日まで、平均170日、最良は155日が過去の成績になっています。

15、検定成績

と殺時の生体重は90匁が理想で、検定開始時の平均日数は71日がよく、検定期間中の増体重は平均70

岡山畜産便り 1962.06

胚、検定期間中の毎日増体量は平均 700 瓦がよろしいが、悪いものは 660 瓦、優れているものは 750 瓦になっています。

1960 年の平均毎日増体重は{(と殺時生体重-検定開始時生体重)÷検定日数}はランドレース 750 瓦、ラージホワイト(大ヨークシャー) 710 瓦になっています。と殺時の体長(頸椎から恥骨先端まで)は最低 93 糎、長いもので 100 糎、理想は 95~96 糎です。

1958 年から 195 年までのランドレース後代検定成績は「第 5 表」のとおりですが、と殺時までの日数と Fe(スカンジナビヤ半島で用いられている飼料単位で、大麦 1 胚の養分に等しい。)の所要量は少ないほどよしい。毎日の増体量は多く、背脂肪平均厚は薄い方がよく、背脂肪分布、ベリイ、ハム、肉量は得点の多いほど優れ、12 点以上は最優秀の部類に属します。

スウェーデンでは最初、体長の長いものが喜ばれていましたが、最近はその段階を過ぎ、伸び、巾、深みのバランスの取れた豚が喜ばれています。つまり現在の理想体長は前述のように 95~96 糎となっていますが、1960 年の平均体長は 96.1 糎と理想を越えています。

スウェーデンでは濃厚飼料として大変とエン麦の粉碎したものが主体として与えられていますが、これらの穀類が脂肪、肉質に及ぼす効果は非常に大きいものと思います。ですからこの地方では飼料単位として Fe が用いられた大麦の栄養価を基準とするようになったものと思います。豚の生体重 1 胚増体に要した飼料量は、と殺生体重から検定開始生体重を差引いたもので、検定期間中に要した飼料の量を除いたものですが、この飼料量が少ない程よいこととなります。

16、枝肉検定

マルメ市の東北約 100 糎の地点にあるクリステンスタードの枝肉検定所におもむきましたが、ここはと殺場、成豚せり市場等が併設された大規模のものでした。後代検定所が 6 カ所あるように、枝肉検定所も国内に 6 カ所あります。

後代検定所から送られて来た検定豚は、と殺した後、背線にそって縦半分に電気鋸で切断され一夜摂氏 8~9 度の冷蔵室内に吊されます。例えば昨日 12

時に殺されたとすれば、一晩冷蔵室に入れ、本日 12 時から検査されます。

枝肉の品質を判定するにあたっては、肉の販売者の要望にそのような豚に良い評価点が与えられるような採点法がとられています。

例えば、脂肪の厚さがうすくても、特定の場所が厚いことは肉の消費者が嫌うというような場合にはいくら平均厚がうすくても何にもなりません。そのために平均厚ばかりでなく背脂肪分布を算定し、特に肉販売者、消費者が嫌う場所に脂が厚い場合には減点をするという方法をとっています。スウェーデンがこの方法を取るのに極めて有利であり、しかも積極的であるのは、と殺場、後代検定所、種豚飼育団体、政府の線が密接に結びついているからです。

次に枝肉検定の各部位における測定方法および評点方法等については、総合畜産発行の「総合畜産 6 月号」にその大要を記しましたが、細部について稿をあらためて後日掲載したいと思っています。

17、ランドレース繁殖農家視察

スウェーデンにはランドレース純粋繁殖農家は 200 戸ありますが、このうち主として国の南部を中心とした 30 戸について視察しました。繁殖農家はハードブック(国から与えられた豚検定台帳)に飼育豚

(第五表) スウェーデンのランドレース後代検定成績

(一九五八〜一九五九年、三、一六二頭の平均)

日と殺時 数	毎日 増体量	一胚 Fe	体 長	背 平均 厚	背 脂肪 分布	ベ リ イ 評 点	ハ ム 評 点	肉 量 評 点
二・三	六・九	三・五	九・四	三・〇	一・三	二・六	二・六	二・三



農家豚舎の排糞装置(電気によりチェーンで豚舎内の排糞を舎外へ運搬する)

岡山畜産便り 1962.06

の記録をしていますが、このブックがその農家の成績を現していますから種豚購入にあたって個々の成績を容易に知ることができます。

スウェーデンでは生産された仔豚の名号を付けるのに次の方法を採用しています。つまり、雌子豚はその農場名を付け、雄仔豚は父豚の頭文字をとった単語を付けることにしています。

育成豚は2米に2.3～3米四方の豚房に対し、7頭から最高10頭位飼育され、将来種豚として繁殖に供用される豚の乳頭は、左右それぞれ7個が良いとされています。生後3週間までの仔豚の消耗率は16%位ですが、このうち2%が死産率と考えられ、16%のうち淘汰率が最高となっています。分娩直後の仔豚は経営規模にもよりますが、人件費が高くつくので殆んど人手をかけずに、母豚につけばなしにしています。ですから生まれて数日間は臍帯を長く引いているものも見受けました。日本ではちょっと考えられないことですが、スウェーデン人は「母豚が自分で処理できないような、しかも能率の悪いものは淘汰し、だんだんと良い豚に仕上げて行く。」といっています。

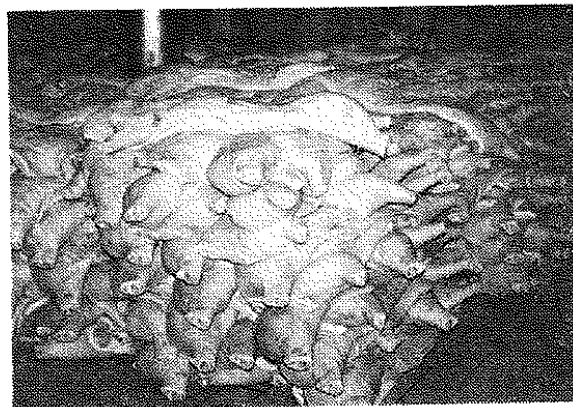
種雄豚は小農場では2～3年使用するのみですが、これは雄豚の供給が余り高くない値段で入手できるため、血液濃度を濃くしないためにも早く更新することにしています。大農場では5～6年間を優れたものは使っています。種母豚は最高20産のものもありますが、普通5～6年で更新しています。繁殖月令は普通雄生後8～9ヵ月、雌7～8ヵ月で体重100 ㍑位、使用年限は一般には2.5～3年、雄はこれ以上長く使っています。

人工授精は雄豚供給が充分できるため、現在スウェーデンでは1ヵ所、農協有の人工授精所があるのみです。

農家が購入している配合飼料は1袋50 ㍑入りで、1 ㍑当35円で、配合内容は、えん麦、大麦を主体としてカルシウム、ミネラル等を混合しています。農家はこれに自給の大麦、えん麦、馬鈴薯等を混ぜて給与していますが、その%は不明でした。1日の飼料費は体重100 ㍑位の豚で105 円位です。

18. 南部地帯の農家経営

スウェーデン南部地帯の農家耕地面積平均は13ヘ



塩漬の終わったペーコンの山

クタールとなっています。しかしこの場合2ヘクタール以下の農家は除外してあります。2ヘクタール以上の農家は3万戸で、典型的農家の作付内容は「第6表」のとおりです。

完全配合飼料と農家の栽培する飼料に対しては常時家畜教育所が技術指導を行なっていますが、その結果南部地方では1ヘクタール当り、えん麦4トン、少し多い場所で6トン生産しています。大麦の収穫がえん麦より少々多いようですが、普通えん麦と同量位です。これら穀類の播種は散播で、肥料は厩肥以外に窒素、リン酸、加里全部を適量与え、この外にマグネシウム、化学肥料BO（成分不明）を施肥しています。

この地方は土壌がよいため砂糖原料であるビートが多く栽培され、ビート生産農家は他の作物より多くの収益をあげております。私の行った10月下旬から11月中旬にかけてはビートの収穫最中で、トラクターけん引のビート掘取機で掘り起こされたビートは、ナタでビートトップを切り落とし、収穫していました。小農家では日本同様手でぬき取っていました。収穫されたビートはトラクターけん引車1台又は2台連結で、近くの工場へ運搬し、帰途は生ビート粕をけん引車一杯積込んで持ち帰り、コンクリート枠のトレンチサイロにビートトップと交互に堆積沈圧して、その上にビニールを覆い、土砂をかけています。でき

(第六表) スウェーデンの典型的農家の作付割合

作付割合	作物名
三〇%	大えん麦
一五%	牧草
一五%	小麦
一五%	馬鈴薯
五%	ライ麦
五%	シード類
五%	その他

岡山畜産便り 1962.06

あがったサイレージは主として乳牛に与えられますが生のビートトップは乳牛、豚、その他家畜の初冬飼料として活用されています。農家によってはトップを車一杯積んで放牧場内へ引込み、乳牛に自由に食べさせている風景も見られました。この場合カルシウムの給与による修酸害防止は全然行っていません。後日訪問したデンマークの酪農試験場の担当官は「修酸の問題は十分知っているが、実際トップを与えても害がないので、修酸中和の意味で特別にはカルシウムを与えていない。」

とっていました。この点日本でも考える必要がないのではないかと考えます。

2週間スウェーデン南部の各地施設、農家を見学後、1週間農家と農学校の農場で実習しましたが、スウェーデン人は実によく働く国民であると思いました。或る30才位の夫婦と8才位の女子の3人暮らしの小作農家で1日実習しましたが、夫婦で30ヘクタールの畑と住宅、大農具を借りて農業を営んでいました。家畜はランドレース種豚100頭、自家飲用ホルスタイン搾乳牛1頭を飼育し、農機具は大型トラクター、同附属機械でしたが、2人で30ヘクタールを耕作することは並大抵の努力ではありません

或る農家では仕事の分担労働を行っていましたが、私が実習したのは、そのうちの畜舎管理でした。40頭のホルスタイン種と20頭のランドレース種豚を40才位の長男と、月給で雇われている17、8才の娘さんの2人で管理していました。この娘さんは町で生まれ小学校8年過程を卒業後、町の生活を嫌って農家へ月給で住み込んでいましたが、彼女の毎日の仕事は男と2人で乳牛と豚を管理することです。乳牛は1日朝夕2回電気搾乳器2台で搾乳していました。30余頭を1時間少々で終り、後搾りは全然行っていません。今から10数年前までは後搾りを行っていたが、多頭飼育による労働節約を目的に、搾乳回数は多い乳量のものでも1日2回とし、後搾りを中止したとのことでした。

「搾乳回数を増し、後搾りをすれば、乳量は多くなるが、多くなった乳量の代価とそれに要した労賃と比較すると、労賃の方が高つく。」というのが北欧人の考え方です。

わが国においても、農村労働力が少なくなるにつ

れて、多頭飼育化と労賃問題を考えて管理方式を決定する時期であると考えます。



乳牛に自由に採食させている
ビートトップ